様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 3 日現在

機関番号：３３９０１
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５３０７９４
研究課題名（和文）　近代日本の実学人材形成の拠点グラスゴウにおける日本人留学生の実態調査研究
研究課題名（英文）　Survey of Japanese students in Glasgow, a center of development of modern Japanese human resources skilled in practical sciences
研究代表者
加藤　鉦治（KATOH SHOJI）
愛知大学・法学部・教授
研究者番号：00109232

研究成果の概要（和文）：明治期のグラスゴウ大学には 50 名，ストラスクライド大学には 21 名の日本人が留学した。彼らは工学，造船学その他の自然諸科学を修めただけでなく，実験室での実験実習ならびに現場での実地研修も体験することができた。グラスゴウ大学に在籍のままストラスクライド大学の夜間課程に学び，専門技術の習得に直結するような実務的な科目も修得できた。しかも，かつてのお雇い教師H．ダイアーの学習上の支援を受けることもできた。したがって，グラスゴウは短期日のうちに実学人材の育成をめざした明治日本にとって，格好の留学地であった。

研究成果の概要（英文）：During the Meiji Era, 50 Japanese students studied at Glasgow University and 21 at Strathclyde University. These students not only studied engineering, shipbuilding and natural sciences in addition to various other sciences, but were encouraged to gain hands-on experiences in laboratories as well as on-the-jop training. Many of them attended night cources at Strathclyde University while they were still at Glasgow University, which allowed them to study the types of practical subjects that directly equipped them with specialized skills. Furthermore, they were able to benefit from the academic assistance offered by Henry Dyer, who had previously been an oyatoi (“hired”) instructor in the employ of the Meiji government. For these reasons, given the goal of Meiji-era Japan of developing human resources with skills in practical sciences within a relatively short timeframe, Glasgow proved to be an ideal destination for Japanese students.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
2012 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：教育史

１．研究開始当初の背景

(1) 英国のなかのスコットランド，とりわけグラスゴウは，①近代日本と緊密な関係をもち，近代日本の成立・発展において大きな貢

献が認められること，②内外教育交渉における「教育連鎖」の拠点の一つであったことに着目し，本研究課題を構想するに至った。

(2) 具体的には，①幕末におけるスコットランド系商社ジャーディン・マセソン商会の支援による長州五人組の英国留学（密航）に始まり，②同商会の仲介による岩倉使節団のグラスゴウ訪問，③グラスゴウ大学W．トムソン教授等によるお雇い工学教師陣の編成と日本への派遣，④かれらお雇い教師陣の推薦と紹介による日本人留学生のグラスゴウへの派遣，⑤グラスゴウ留学による実学人材の形成，などという「教育連鎖」である。

２．研究の目的

(1) 日本の工業化・近代化におけるスコットランド，とりわけ幕末・明治期におけるグラスゴウにおける日本人留学生の実態，特色，背景を分析対象とし，近代日本の実学人材が形成される具体相について考察する。

(2) 具体的には，①グラスゴウの２大学（グラスゴウ大学，ストラスクライド大学）に学んだ日本人留学生の確定，学修の内容と成績，大学生活の実際，留学生間の交流。③グラスゴウ大学日本語資格試験，ストラスクライド大学の夜間授業の受講，スコットランド各地における実地研修。③お雇いスコットランド人教師の雇い入れによるコネクションの成立，④彼らの推薦と紹介による留学地グラスゴウの選定という「教育連鎖」の局面，についての考察である。

３．研究の方法

(1) 入学・進級・履修に関する記録史料（登録簿，在籍簿，学級名簿，大学要覧），ならびに修学上の諸問題をめぐる教授会記録および理事会記録を素材として，(2) 留学生各人の氏名，履修科目，学業成績，修学期間，宿所などを明らかにし，(3) それらを元に，明治期グラスゴウ日本人留学生の実態・動向・特色を，具体的に明らかにした。

４．研究成果

(1) 近代日本の発足期には殖産興業が目ざされ実学人材の養成が急務とされただけに，自然科学の学問中心地であり実学教育の先進地であったグラスゴウは，明治日本との間で工業技術・教育文化の面で緊密な相互交流が進展をみた。同地にある二つの大学には数多くの日本人留学生が集まり，特色ある学習機会を提供した。

(2) まず，グラスゴウ大学には，明治時代に少なくとも 50 名が学んだ。

①かれらの出身校は，工部大学校出身者９名，同校が併合された帝国大学および東京帝国大学工科大学出身者が５名を数えた。日清戦争後の 19 世紀末になると海軍関係者が増加し，海軍機関学校出身者４名を含めて合計６名にのぼった。造船・海運業界の指導者の二世も３名を数える。慶応義塾出身者も３名含まれる。

②履修科目はほぼ全員が日本の殖産興業につながる自然諸科学を受講した。工学ないし機械学が一番多く，50 名中 30 名がこれを選択している。ついで自然哲学ないし物理学が 25 名，造船学 24 名，数学 22 名，化学 16 名などという内訳である。同じ科目でも，講義コースとともに実験コースを受講した者が多い。同大学では，教室での理論学習を実験室での実験実習（さらには学外での実習体験）に結びつけた教育がおこなわれていた。

③学業成績が優秀であったことが特筆される。とりわけ初期の留学生は輝かしい成績を残し，種々の受賞記録が残っている。学位授与式において日本人留学生の優秀さと学習ぶりが称えられ，地元紙に報道された事例もある。工部大学校第一期留学生で 1880 年度に学んだ南清・志田林三郎・高山直質の場合がそうであって，『朝野新聞』や『工学会誌』を通じて日本にも紹介された。

④修学期間は区々で短期の者もいれば長期の者も少なくない。１年間だけの修学者は 24 名，２年間の修学者 13 名，３年間４名，４年間６名，５年間１名，６年間２名いう内訳である。かれらのうち学士号を取得した者は 12 名を数える。

⑤修学中に学外において実地研修を体験することが奨励されていた。同大学の学習課程は６ヶ月単位で編成され，10 月から３月までの冬学期は大学に通うが，夏学期の６ヶ月間は学外での実地研修に出かけることができた。日本人留学生は，10 名が造船所，鉄工所，鉄道会社，郵便局などでの実修を体験している。そのうち６名が工部大学校出身者であった。工部大学校では教室での学習と実地研修を交互に組み込むという教育課程が，H．ダイアーの発案ですでに実施に移されていた。

⑥資格試験の外国語選択科目に日本語が認定されたことが注目される。留学中の福沢三八が申し出をし，ダイアーがその実現を支援した。試験委員には，最初，在ロンドン領事館一等領事荒川巳次が委嘱されたが，荒川はほどなくして辞退し，ロンドン留学中の夏目金之助（漱石）を推薦した。夏目は 1901 年４月の春季試験と同年 10 月の秋季試験に試験委員をつとめた。夏目が出題した日本語試験問題は今なお不明であるが，福沢三八を含め４名の日本人がこれを受験した記録がある。漱石の帰国後は，日本語受験の希望者があらわれるたびに試験委員が任命された。1902 年秋季試験には，ロンドンに留学してい

た岡倉由三郎が任じられている。

(3) ストラスクライド大学には 21 名が留学した。そのうち，日本開国前にすでに３名が学んでいた。かれらは，横浜と長崎を拠点に日英貿易に乗り出していたスコットランド系商社の斡旋で密出国し，留学地としてグラスゴウを選択した。その最初が山尾庸三である。

同大学は，成人への学習機会の開放，夜間課程の開設，実践的な教育と実学人材の養成という，英国の他の大学にはあまりみられない特色をもっていた。それだけに，日本人留学生 21 名の留学実績には特筆すべき諸点がみられる。

①留学といっても昼間課程に学んだ者は２名だけで，19 名が夜間課程を履修した。しかも，21 名中 20 名は卒業学位を取得するのではなく，特定の専攻科目についてのみ受講した。

②したがって，かれらの履修期間は総じて短い。４年間の修学者１名，３年間の修学者２名（うち１名は准学士号を取得），２年間３名，１年間は 16 名という内訳であった。１年間の修学者 16 名のうち７名は１科目のみの履修者であった。ほかに２科目履修者は２名，３科目履修者４名，４科目履修者は１名という内訳である（２名は科目名不明）。

③21 名のうち 14 名がグラスゴウ大学にも修学していた。グラスゴウ大学の昼間課程に在籍しながら，ストラスクライド大学（正確にはグラスゴウ・西部スコットランド技術大学）の夜間課程に学んだのである。

④その夜間課程における履修科目は，蒸気機関の履修者９名，造船学８名，数学５名，電気工学５名，化学５名，磁気学・電気学４名，機械学製図３名，自然哲学３名，応用機械学２名，原動機２名，建築工事２名，冶金学２名，機械製図１名，重金属製品製造１名，ガス機関１名，船舶工学製図１名，などという内訳であった。昼間課程では，数学，自然哲学，力学，実験物理学，応用物理学，化学講義，応用化学，機械学，応用機械学，原動機（講義），原動機(実習)，工学製図，機械製図などを履修した。

夜間課程であれ昼間課程であれ，蒸気機関，原動機，建築工事，重金属製品製造，ガス機関という科目名にあらわれているように，専門技術の習得に直結するような実務に関連づけた科目の履修が目立っている。

⑤実地研修を体験した者は山尾庸三および高峰譲吉の２名いた。そのうち山尾は，留学から帰ると工部省の創設を推進し，また同省の要職を歴任するなか，グラスゴウの造船所における実地研修を含めた留学体験をもとに実学人材の教育機関の設立を計画した。ダイアーが赴任すると，同じストラスクライド大学に学んだという間柄もあって，ダイアーを支援した。ダイアーが提案した工学教育構想が採用されると，その具体化を促進することになる。

(4) 要するに，グラスゴウの両大学では，明治日本が求めていた工学，造船学その他の諸科学を学ぶことができただけでなく，教室での理論学習を実験室での実習あるいは現場での実地研修に結びつけて学習を深めるという，特色ある教育体制が用意されていた。とくに学外での実地研修が奨励されていて，意欲ある者であれば造船所，鉄工所，鉄道会社などで実習を体験することができた。

しかも，ストラスクライド大学では夜間課程も開設されていたので，昼間はグラスゴウ大学もしくはストラスクライド大学での学習，あるいは学外での実地研修を体験しながら，夜間にはストラスクライド大学で学習する機会も用意されていた。したがって，グラスゴウは，短期日のうちに実学人材の育成をめざしていた明治日本にとってふさわしい留学地であったと考えられる。

(5) ①お雇い教師が介在する形で留学先が選定され促進されるという，内外教育交渉における「教育連鎖」という研究視角は，グラスゴウ以外の交流史研究にも示唆を与えることができる。

②幕末・明治期グラスゴウ日本人留学生の考察を通して，日英交流の歴史像理解だけでなく，日本近代化・工業化の国際環境についての理解が進展される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① 加藤詔士「お雇い教師ヘンリー・ダイアー研究－わが国における成果と動向－」，日本英学史学会関西支部『関西英学史研究』第７号（2012 年８月）21－55 頁，査読有。

② 加藤詔士「わが国におけるお雇い教師H. ダイアー研究－成果と動向－」，関西教育学会『関西教育学会年報』第 36 号(2012 年６月）31－35 頁，査読無。

③ 加藤詔士「Henry Dyer: Pioneer of Interchange with Japan－Focusing on his Friendship with Sakuro Tanabe－」，愛知大学教職課程『愛知大学教職課程研究年報』創刊号（2011 年 12 月）31－42 頁，査読無。

④ 加藤詔士「明治期グラスゴウ大学日本人留学生」，日本英学史学会関西支部『関

西英学史研究』６号(2011 年 12 月）21－53 頁，査読有。

⑤ 加藤詔士「後藤牧太の英国留学」，日本英学史学会『英学史研究』第 44 号（2011 年 10 月）１－25 頁，査読有。

⑥ 加藤詔士「南清のグラスゴウ留学」，加藤詔士・吉川卓治共編『西洋世界と日本の近代化，教育文化交流史研究』大学教育出版，2010 年５月，82－102 頁，査読無。

⑦ 加藤詔士「日本・スコットランド教育文化交流の諸相－明治日本とグラスゴウ」，名古屋大学大学院教育発達科学研究科『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』第 56 巻第２号（2010 年１月）１－39 頁，査読無。

⑧ 加藤詔士「工部大学校お雇い教師ヘンリー・ダイアーへの謝意」，日本英学史学会関西支部『関西英学史研究』第４号（2009 年 11 月）１－15 頁，査読有。

⑨ 加藤詔士「グラスゴウと明治日本－ストラスクライド大学における日英交流－」，日本英学史学会『英学史研究』第 42 号（2009 年 10 月）15－37 頁，査読有。

〔学会発表〕（計３件）

① 加藤詔士「わが国におけるお雇い教師H.ダイアー研究－成果と動向－」関西教育学会第 63 回大会，2011 年 11 月 13 日，近大姫路大学

② 加藤詔士「後藤牧太の英国留学」日本英学史学会関西支部第 47 回大会，2011 年５月 21 日，桃山学院大学

③ 加藤詔士「明治期グラスゴウ大学日本人留学生」日本英学史学会関西支部第 19 回研究大会，2010 年８月 28 日，同志社大学

〔図書〕（計１件）

① 加藤詔士・吉川卓治共編『西洋世界と日本の近代化，教育文化交流史研究』大学教育出版，2010

〔その他〕

① 加藤詔士『近代日本の実学人材形成の拠点グラスゴウにおける日本人留学生の実態調査研究』科学研究費補助金研究成果報告書，2013，全 287 頁。

＊加藤詔士は加藤鉦治の筆名。

６．研究組織

(1)研究代表者

加藤　鉦治（KATOH SHOJI）
愛知大学・法学部・教授
研究者番号：00109232